

「イエスと気づかず」井上隆晶牧師 ルカによる福音書 24 章 13～35 節

①【イエス様の聖書の読み方】

イエス様が復活した日、二人の弟子がエルサレムを後にして、エマオという村に向かって旅をしていました。二人の名前は、クレオパとルカだと言われています。そこへイエス様が旅人の姿で近寄ってきて彼らと一緒に歩き始めたのですが、彼らの目は遮られていてイエス様だとは分かりません。イエス様は「歩きながらやり取りしているその話は何のことですか」（17 節）と聞くと、二人は暗い顔をして立ち止まり、イエス様が殺されてしまったこと、三日目に墓に行くと遺体がなかったこと、天使が現れ「イエス様は生きています」と言ったことなどを話しました。彼らは「この方は…力のある預言者でした」（19）「望みをかけていました」（21）とすべて過去形で語っています。今は誰も語ってくれない、今は希望がないというのです。すると旅人であるイエス様は弟子たちに「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」といわれ、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明され」（25～27 節）ました。「モーセとすべての預言者」というのは、旧約聖書のことです。イエス様の当時は旧約聖書しかありませんから、そこからイエス様について書かれている箇所を取り上げ説明されたのです。イエス様の説教です。それを聞いて二人の心は熱くなり、希望が出て来ました。後でその時のことを振り返り「聖書を説明して下さったとき、私たちの心は燃えていたではないか」（24：32）と語り合っています。

●聖書が神の靈感によって書かれている以上、キリストの霊が満ちている教会で読む時に一番効果を現します。聖書はキリストについて証したものです。主ご自身「聖書はわたしについて証しをするものだ」（ヨハネ 5：39）といわれました。キリストは聖書の最初の一行から最後の一行まで、全体を縫い合わせている糸のようなものです。アレキサンデル・シュメーマンは「クリスチャンとは、目を注ぐ所にはどこにでもキリストを見出し、喜びにひたることができる存在だ」といいました。アダムを創造したのもキリスト、エデンを歩かれたのもキリスト、モーセに燃える柴の中で現れたのもキリストです。詩編を読むと、どこにもキリストのことが書かれています。すべてをキリストのことだと思って読むと、意味が変わってくるのです。

②【説教と聖餐の中にキリストはおられ、姿を現す】

やがて彼らは目的の村につきますが、イエス様は「先へ行こうとされる様子だった」（ルカ 24：28）とあります。イエス様の目的地と彼らの目的地は違っていた

ということです。罪というのは「的をはずす」という意味ですから、彼らの旅は外的な旅であることが分かります。しかし二人は「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」(29 節) といってイエス様と共にいる努力をしたのです。私たちもキリストと共にいる努力をしなければなりません。「見よ、あなたから遠ざかる者は滅びる。御もとから迷い去る者をあなたは絶たれる。」(詩篇 73 : 27) という言葉を私は怖れて聞きます。悪魔はキリストから私たちを引き離そうと働いています。人は簡単にキリストから離れてしまいます。

さて夕食の時のことです。「一緒に食事の席に着いた時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」(30~31 節) とあります。「パンを取り、賛美の祈りを唱え、裂き、渡す」この四つの動作は聖餐式と同じです。聖餐によって彼らの目が開きます。説教だけではまだ目が開きませんが、聖餐式まで来ると目が開くのです。だから説教だけでは駄目なのです。聖餐が一番重要なのです。どんなに迫害されても、教会は、聖餐式を行い続けました。

この物語は、信仰を失い教会を去ってしまう弟子たちの物語から始まります。彼等には同行してしてくださっているキリストが見えません。一緒に歩いているのに見えていないのです。ところが、イエス様による聖書講話と、イエス様によるパン裂き(聖餐式)によって目が開くのです。説教と聖餐を繰り返し体験することによって、キリストが見えてくるのです。そして彼らは教会に帰るのです。説教と聖餐の中にキリストはおられ、姿を現すのです。説教と聖餐によってイエス様は私と共におられるのが見えてくるということです。

③【悔い改めて帰ることの幸せ】

彼らはすぐにエルサレムに引き返します。それは彼らが再び信仰の旅を始めたことを現しています。説教と聖餐には人生を変える力があります。地へ落ちてゆく私たちを、天へ引き上げる力があります。エルサレムに帰ると、そこには 11 人の使徒と仲間たちの群れが待っていました。これは教会のひな形です。彼らは教会への帰ったのです。

●アメリカのトランプ大統領は自身をキリストのような姿に描いた AI 画像を投稿しました。ローマ教皇が「血にまみれた手を持つ指導者たちの祈りを神は拒絶する。神はいかなる紛争も祝福しない」としてイランでの戦争を非難すると、トランプ大統領はアメリカ人である教皇について「犯罪に甘く、外交はひどい。レオは感謝すべきだ。誰もが知っているように、彼が選ばれたのはサプライズだったからだ。教皇候補のどのリストにも載っておらず、ただアメリカ人だからという理由で選ばれたにすぎない。それがトランプ大統領とうまくやっていくための最善の方法だと考えられたのだ。もし私がホワイトハウスにいないければ、レオがバチカンにいることもなかっただろう。」と非難しました。

●イスラエルのネタニヤフ首相はホロコースト追悼演説で戦争を批判するヨーロ

ッパ諸国に対して「ヨーロッパは深刻な道徳的弱さに陥っている」と批判しました。ヨーロッパは自分たちを迫害し、ホロコーストしたのを忘れたのか。自分たちは被害者であって正しいのだということです。そしてイランを「絶対悪」とし、自分のしている戦争は正しいと言っているのです。

彼等の特徴は何でしょう。それは高慢さです。自分たちは正しい、間違っているのは周りの人である。自分たちは善である、周りの人たちが悪である、という考え方です。これはカルト宗教とまったく同じです。統一協会は、「二性性相」という言葉を用い、万物をすべて二つに分けます。男と女、オスとメス、雄しべと雌しべ、プラスとマイナス、この世と霊界、神側の人間と悪魔側の人間。そして自分たち統一協会は神側であり、自分たちを批判する者はすべて悪魔側の人間であるといいました。神は自分を正しいとする人たちを受け入れません。

旧約聖書の哀歌の中で、著者はエルサレムの町の酷い惨状を描きます。バビロンによって町は焼かれ、破壊されました。町の中では公開絞首刑が行われ、婦人は犯され、若者と子供は重労働を課せられます。まさに地獄です。しかし、著者はこのように悲しみながらもなお神に心を向けて祈ります。「いかに災いなことか。わたしたちは罪を犯したのだ。…主よ、御もとに立ち帰らせてください。わたしたちは立ち帰ります。わたしたちの日々を新しくして、昔のようにしてください。」（哀歌 5：16、21）このような辛い目にあったのは自分が罪を犯したからだ、と彼はいうのです。悪いのは周りの人や、周りの国ではない、この私自身に問題があったのだ。私が神に罪を犯したからだということです。これこそ信仰者の姿です。キリスト教徒もそうでなければなりません。今のイスラエルにはこの悔い改めがありません。ですから神に帰ろうとしないのです。神は悔い改める者の神です。悔い改めない者には、赦しは与えられないのです。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「信仰者とはどんなときにも帰るべき所を持っている者である。これこそが信仰者に与えられている恵みである。…イスラエルの民のすばらしさは、帰るべき神を持っていたということである。彼らは幾度も神から離れ、神に背いた。そして神の怒りを買ひ、苦汁を味わった。しかしそのつど彼らは悔い改めて神に帰った。神はその彼らを赦し、繁栄をもとに帰された。」

私たちも自らを省みて、悔い改めましょう。エレミヤのように「わたしたちは罪を犯したのだ。…主よ、御もとに立ち帰らせてください。わたしたちは立ち帰ります。」と祈りたいと思います。